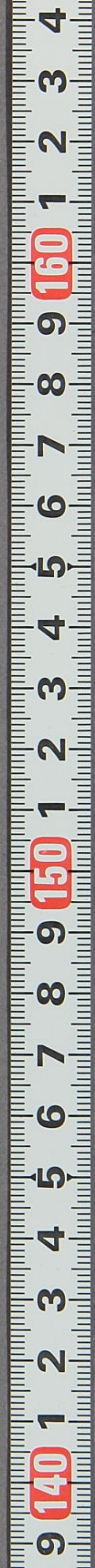


八代集抄

新古今歌上下

四三

特別  
イ 4  
3163  
104(43)





平  
14  
3163  
104(43)



か子あひ乃清雪の  
葛いぢのうら白  
くうらき坂音  
よわ裏ももろふ  
法本わりのし舞  
吹之とこりあり  
風を少くせ秋  
まらて葛のぢ  
ひより真あ秋  
風吹心まきまき  
いりて萩のえ好  
まのれいハねを  
さり風のうら  
と萩のぢいり

新古今和歌集卷之第四

秋并上

歌三十一

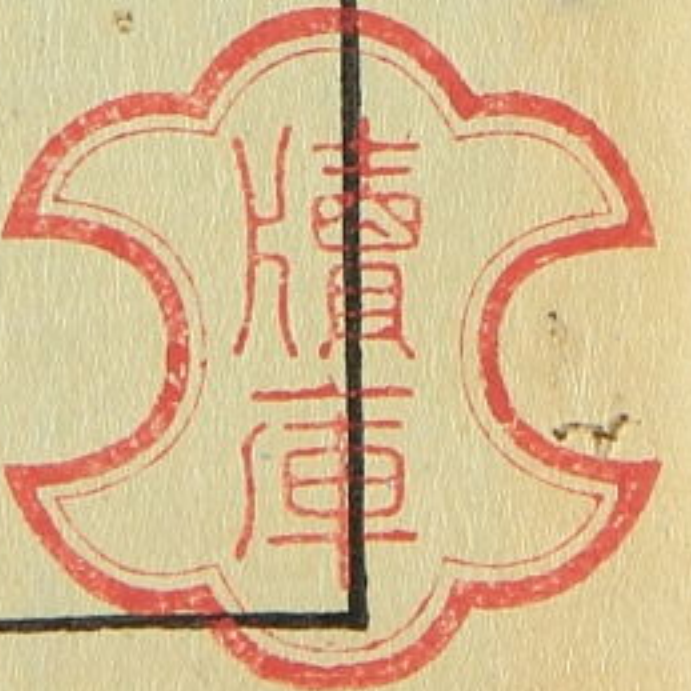
中納言家持

か子あひ乃いむる乃山れ葛かつ  
うらきとと秋いさるふり  
百首并よえり秋乃心

崇徳院侍

いりてと萩乃をむけのぢとあり  
る。や秋さう風もきこゆ

若原季通





















中納言中將の侍りたる時家より山家  
 早秋とて心もよもせ侍りたるよ  
 法華寺入道前園白大政公  
 又袖ぬると秋のまらりたり  
 今志小片きうう一山田よりひこさく  
 崇徳院より百首奇なりたる時  
 皇太后宮大史俊成

去人として三田の秋  
 を流るるも秋のま  
 す心まればや  
 中納言の秋のまらり  
 夕まらるるも秋のま  
 らるるも秋のまらり今  
 より又れきうむむ  
 けりなれは秋のまらり  
 秋のまらり今  
 一やしるるも秋のま  
 左今にるるも秋のま  
 める物とて流るるも

中納言やうう一山田よりひこさく  
 秋まらりたりとれりたり  
 秋まらりたりとれりたり  
 中納言具平親王  
 中納言の秋のまらり  
 今まらりたりとれりたり  
 後徳大寺大史  
 今まらりたりとれりたり  
 崇徳院より百首奇なりたる時  
 皇太后宮大史俊成































元真集よりいふ六高

とむつこころ野の女

弟のたをなまうら

うすまふらまは

たされい玉ちる

あちちりく風う

あやむのおまうす

まねまぬいよこ

まうり風情やま

まらまら

あちちるぬい

あまけりまら若

こころぬれ秋のう

秋ぬまは 霜結

うもはまらまら

千五百番舟合う

醍醐道大寺右  
乃近中將良平

夕されい玉ちるの乃まら

まらまらいめね秋のまら

あらまらぬい 公ミヤコ賦ミヤコ法師中務卿定基律師

こわれまらぬい 秋のまら

崇徳院の百首舟まらり

乃原清備卿

うすまらまら乃花のぬまら

四十一

うすまらまら

秋はたたらまら

こころぬれ秋のう

あまけりまら若

こころぬれ秋のう

秋ぬまは 霜結

うもはまらまら

あちちるぬい

あまけりまら若

秋はゆつとこれつらひらん

入道前因白太政大臣右大臣の侍ら

百首舟よまらせ侍ら

白太右官大史後成

こころぬれ秋のう

あまけりまら若

こころぬれ秋のう

あまけりまら若

こころぬれ秋のう











あけぬしらのふりし

家賦 自讀并注云

すく野鳥の鹿の

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

崇徳院時百首并

大花江紀宗

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

源重之女

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし

あけぬしらのふりし















りけつ湖のわら越えの

良文集十一 相思夕上

童豆菘思輝連薄耳秋

秋くれいさあまの

宝音常盤乃山

とらまをちのこりり

りあをさうつらり

とあやり

あま風乃よも

秋風乃け山の

吹くれいの

るいあわれと

乃宮風の傳

りりつ

らひはまの

和泉式部

秋くれいさあまの

うはらとくわう

曾孫好佳

あま風乃よも

あま乃ま

相模

りりま乃

りりつ

嗚乃らむの

秋風乃

詠風

乃野

乃野

乃野

乃野

乃野

乃野

乃野

乃野

法性寺入道前関白太政大臣家の

乃野

乃野

乃野

乃野

乃野

乃野

乃野























つらねおのの産の  
は身徳力といふ  
まの海にや〜  
ひきまの月  
く〜  
乃福成成  
後〜  
望〜  
月〜  
松〜  
こ〜  
あ〜

つらねおのの産の  
は身徳力といふ  
まの海にや〜  
ひきまの月  
く〜  
乃福成成  
後〜  
望〜  
月〜  
松〜  
こ〜  
あ〜

月前松風 寂蓮法師

鴨長明

又事とて〜  
あ〜  
松風〜  
此〜  
一〜  
一〜  
宗〜  
あ〜  
三〜  
ゆ〜  
近〜  
あ〜

わ〜  
あ〜  
お〜  
お〜

松原秀雄



心ある可しれ雲  
野引云物くこそ  
物ありし也聲に心  
あまのまればし  
秋をぬくも  
月とやとせんこめ  
乃ざ小信軍の事  
ら心あり海土外と  
よりの舟乃落河  
比類ちくや  
わとれかあふあ  
いとい他乃備の  
月いなるらも難  
乃月い正れとこ

八月十六日船并所乃舟合り  
海を秋月とらふ

宮内

心ある可しれ雲のいづこ  
月とやとせんこめぬきぬ物  
宜秋門院丹後子我地  
わとれかあふあれ秋のよもれ  
こころいづこ月いなるらも  
松とまやとららむあまれ秋の社  
信長明

松とまやとららむあ  
言音云物と小社んあ  
ぬれく月いなるらも  
ことと心あふあれ秋の  
まらむ社と月い  
やも物とこ  
こころいづこのまらむ  
野の海を秋月とら  
月とやとせんこめ  
とららむあまの秋  
とららむあまの秋  
秋の雲れ月とら  
月とやとせんこめ  
乃雲とららむあ  
近く推注の海と

月い物おりふちひの  
歌とららむと 七条院大納言  
こころいづこのまらむ  
波と月とららむと

和舟正舟合り海を月と  
若原憲陸親長

秋乃れ力やわらぬれ  
けけしこちの事おま  
紅とららむと 前大信正  
うきとららむと











いづる氣をよきよ  
をふけて我身はま  
氣とてさそいふか  
中ハ結思催されて神  
ねも一田月ふらり  
て神ノ氣のあつた  
らけりといふは  
月けのすかた  
いづる氣をよきよ  
をふけて我身はま  
氣とてさそいふか  
中ハ結思催されて神  
ねも一田月ふらり  
て神ノ氣のあつた  
らけりといふは  
月けのすかた

東采四年一田家奇合り

大納言經信

月けりすかた  
中ハ結思催されて神  
ねも一田月ふらり  
て神ノ氣のあつた  
らけりといふは  
月けのすかた  
いづる氣をよきよ  
をふけて我身はま  
氣とてさそいふか  
中ハ結思催されて神  
ねも一田月ふらり  
て神ノ氣のあつた  
らけりといふは  
月けのすかた

崇徳院百首奇合り

左京大夫石浦

月けりすかた  
中ハ結思催されて神  
ねも一田月ふらり  
て神ノ氣のあつた  
らけりといふは  
月けのすかた

秋風をよきよ  
をふけて我身はま  
氣とてさそいふか  
中ハ結思催されて神  
ねも一田月ふらり  
て神ノ氣のあつた  
らけりといふは  
月けのすかた

いづる氣をよきよ  
をふけて我身はま  
氣とてさそいふか  
中ハ結思催されて神  
ねも一田月ふらり  
て神ノ氣のあつた  
らけりといふは  
月けのすかた

殷富門院大輔

可子内親王







かきつりてはつとて  
見たりてはつとて  
其の兵一と給人の  
そのゆくまの世業  
小遣小秩有るを  
ておのれんを橋姫の  
上なきをいふも  
世をくしつとて  
や我を給人の舟り  
秋のよれをいふも  
ゆきよのえはりの  
ひとつとてまの  
て後乃とて

まのゆくまの世業  
小遣小秩有るを  
ておのれんを橋姫の  
上なきをいふも  
世をくしつとて  
や我を給人の舟り  
秋のよれをいふも  
ゆきよのえはりの  
ひとつとてまの  
て後乃とて

月をなまをまうとて  
宮内卿

月をなまをまうとて  
古昔の村の深むら  
晴ぬれいふと後お  
多れいらの晴むら  
りてまれんといふ  
乃月給人の舟り  
や心るをいふも  
秋乃をいふも  
秋乃をいふも  
も霧るもに霧の  
風乃をいふも  
秋乃をいふも  
娘乃月志のふや  
まのふら真やまの  
ふら真やまの

それゆきまありまの  
影をいふも  
秋乃をいふも  
神りまのこす秋のうとせ

源家長 若人大膳亮 時長子  
和舟不開園有日記

娘乃月志のふや  
をまのこす秋のうとせ  
元久元年八月十日  
まのこす秋のうとせ  
前太政大臣



強し氣風ついで月  
おのれいとのおあつとも  
よきより病ふけり  
いさよのほくとも  
風ついで山田乃唐と  
りも今植並と波  
まうく月と少  
に足す一と期  
秦旬一千餘里漂と  
少鋪 月のさる  
厚のまも伏足の小田に  
いさよのほくとも  
風ついで山田乃唐と  
りも今植並と波  
まうく月と少  
に足す一と期  
秦旬一千餘里漂と  
少鋪 月のさる  
厚のまも伏足の小田に

風ついで山田乃唐と  
おあつとも  
和舟亦舟合つて田家月と  
前大徳正徳  
唐乃まも少  
おねお乃い  
皇太后宮大史後成女  
いさよのほくとも  
風ついで山田乃唐と  
りも今植並と波  
まうく月と少  
に足す一と期  
秦旬一千餘里漂と  
少鋪 月のさる  
厚のまも伏足の小田に

唐乃れい月のさる  
あつとも漏とちと唐  
ついで月と少  
に足す一と期  
秦旬一千餘里漂と  
少鋪 月のさる  
厚のまも伏足の小田に

唐乃れい月のさる  
あつとも漏とちと唐  
ついで月と少  
に足す一と期  
秦旬一千餘里漂と  
少鋪 月のさる  
厚のまも伏足の小田に







あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心

五十首并くしきまうりーとんい

新原雅直

あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心

あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心

あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心

新原雅直

新古今和歌集巻第五

秋并下

あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心

新原雅直

あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心

あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心  
あはれなる神の御心











鹿より目をそらしお  
こらるるれし又<sup>た</sup>つ  
こりぬらうしと  
やまゝの橋の  
心くれしと  
郁芳門院お集書  
前裁合い書合の  
ひらねや  
鹿の秋の  
葛の月の  
また社福  
一は鹿の独ねを  
さや  
う

中宮寺師  
鹿の秋の  
葛の月の  
また社福  
一は鹿の独ねを  
さや  
う

郁芳門院前裁合  
お原野綱

野の云ぬるの  
鹿の秋の  
葛の月の  
また社福  
一は鹿の独ねを  
さや  
う











秋の野の草花をよめる

人磨

秋されいそく白露ありや  
心ゆくも一日  
おの秋草花

秋されいそく白露ありや  
心ゆくも一日  
おの秋草花

天曆清の翁

野の草花をよめる  
秋の野の草花をよめる  
心ゆくも一日  
おの秋草花

秋の野の草花をよめる  
心ゆくも一日  
おの秋草花

後冷泉院  
時為野花  
後冷泉院  
時為野花

秋の野の草花をよめる

秋の野の草花をよめる

白河院

秋の野の草花をよめる  
心ゆくも一日  
おの秋草花

秋の野の草花をよめる  
心ゆくも一日  
おの秋草花

贈大長官



ゆく人呼ばるる  
あまのついで

百首并時 彦達法師

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

秋乃并此中 太上天皇

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

あまのついで

守覚法師 家五十首并時

若原密隆朝臣







本三本々いふありはははね

野列公秋のまはりあり

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

和舟のあふ合ふ月乃とあつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

言因

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

千五百番并合。右原定家期長

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

持衣と疾持る。大納言経信

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ

あつ月あつひのあつ











ついでにねえねえ

よきよきとていふわらわら

りりやちかちかちか

いよやちかちか

ひよこちかちか

野列を村の端と

隙はるるくま音云

松の葉の音

とこのまわり

さういふいふと

みまよに一首の表

形をいひては

五十首并しよりし

寂蓮法師

ひよこちかちか

栗の葉の音

栗の葉の音

松の葉の音

とこのまわり

秋の音とて 太上天皇

さういふいふと

栗の葉の音

栗の葉の音

寂蓮の凡言をいひ

とせぬる陸の音

あけあけのや川

無和名母乃まは

英海きりこい母乃

本とていふかり

あけあけのや川

あけあけのや川

あけあけのや川

あけあけのや川

あけあけのや川

河旁のりやもを 左衛門督通光

あけあけのや川

あけあけのや川

堀河院清時百首并しよりし

とよめる 推大納言公實

あけあけのや川

あけあけのや川

あけあけのや川

あけあけのや川

あけあけのや川

あけあけのや川



山里より書乃ち書  
山よせ乃ち山  
よりに通るる  
なれに書ふ  
心しく山里の  
乃辭とよめ  
あかり乃ち  
小倉ら  
信るる  
も六居乃  
おの

山里より書乃ち書  
山よせ乃ち山  
よりに通るる  
なれに書ふ  
心しく山里の  
乃辭とよめ  
あかり乃ち  
小倉ら  
信るる  
も六居乃  
おの  
あかり乃ち  
書し  
人唐  
あかり乃ち  
少く  
秋風

山

山里より書乃ち書  
山よせ乃ち山  
よりに通るる  
なれに書ふ  
心しく山里の  
乃辭とよめ  
あかり乃ち  
小倉ら  
信るる  
も六居乃  
おの

山里より書乃ち書  
山よせ乃ち山  
よりに通るる  
なれに書ふ  
心しく山里の  
乃辭とよめ  
あかり乃ち  
小倉ら  
信るる  
も六居乃  
おの  
あかり乃ち  
書し  
人唐  
あかり乃ち  
少く  
秋風

山人



古今のまきまをい

てまのん山を登る

よこやの風をわら

明のこのころき

やちちちちちちち

神の降りてくる

まのまのまのまの

まのまをいへまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

西行法師

よこやの風をわら

やまのまのまのまの

まのまをいへまの

まのまのまのまの

五十首舟をいへ

まのま

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのま

朝意法師

おのま

大江の舟波をいへ

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

皇太后宮女

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの



まじりてやうしつゝ  
厚のねをきいて我能  
うかきけし厚し越  
まけしてわらわら  
我をさしあひあふ  
家紙云霧を結い  
乃ちわらわらわら  
すきやれに物す  
て感あふわらわら  
さうさうわらわら  
凡を結いしつゝ  
おのののののの  
はわらわらわらわら  
このうらうらわら  
こののののののの

いふらるるを  
霧をさしあひあふ  
わらわらわらわら  
きつ院沖時内裏より  
むすひつけつら  
花園大書室  
大納言の女  
このうらうらわら  
わらわらわらわら  
わらわらわらわら  
推中納言  
おのののののの

我をさしあひあふ  
まじりてやうしつゝ  
厚のねをきいて我能  
うかきけし厚し越  
まけしてわらわら  
我をさしあひあふ  
家紙云霧を結い  
乃ちわらわらわら  
すきやれに物す  
て感あふわらわら  
さうさうわらわら  
凡を結いしつゝ  
おのののののの  
はわらわらわらわら  
このうらうらわら  
こののののののの

いふらるるを  
霧をさしあひあふ  
わらわらわらわら  
きつ院沖時内裏より  
むすひつけつら  
花園大書室  
大納言の女  
このうらうらわら  
わらわらわらわら  
わらわらわらわら  
推中納言  
おのののののの

前大信の巻

千五百五十五















鹿嶋河内鹿鹿郡 台  
原 彦金部

心しやみおぢやうん  
松も時あみおぢやうん  
とまらうもつかりおぢ  
みおぢやうん  
しつあみおぢやうん  
うらみおぢやうん  
あみおぢやうん  
あみおぢやうん  
あみおぢやうん  
あみおぢやうん

心しやみおぢやうん

松も時あみおぢやうん

大井河内やうん

かみおぢやうん

あみおぢやうん

あみおぢやうん

あみおぢやうん

あみおぢやうん

あみおぢやうん

あみおぢやうん

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ

あみおぢ



















まかりこころを枕詞書  
かゝ志所く書ぬる秋と  
秋とせしめし書  
来てせしめし書  
ふ秋書秋のつとま  
よ秋秋の別の書  
あふくつとま秋を  
とらふらふ秋を  
とらふらふ秋を  
とらふらふ秋を  
とらふらふ秋を  
とらふらふ秋を

かゝ志所く書ぬる秋とせしめぬら  
とらふらふ秋を

五十首并よませ侍らふらふ

ち覚は親と

あふくつとま秋を  
とらふらふ秋を

回九月おらふらふ

前太政大臣

あふくつとま秋を  
とらふらふ秋を



